
悪魔の魔女

聖なる写真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の魔女

【Zコード】

Z8702F

【作者名】

聖なる写真

【あらすじ】

グレイサル皇国とデイル帝国の戦い 突如現れた悪魔に対抗するためグレイサル皇国は“魔女”的伝説に頼ることに…しかし、当の本人は“我は“魔女”ではない”と言いつぶつて…?

(前書き)

作者の企画「鬼にも照明を」の作品です
どうぞお楽しみください

よくよく考えたら俺「ひとつ的好きだなあ
.....

異世界

「……アリス……」

グレイサル皇国とトイル帝国は長いに渡り、争い続けてきた

「くそっ……まだなのかよ……！」

100年にも渡る長い戦争

それを終わらせるためグレイサル皇国はある“物語”に頼る

「本当にこのかよ……『魔女』ってヤツはよお……！」

この世界一巨大と言われるヴェルサネスの紅蓮山の頂上にいると言
われる“魔女”

5000年のときを今なお生きているところ……伝説の魔道士であ
る

アルベルト・カルディロはこゝ、ヴェルサネスの紅蓮山の断崖絶壁を重装備で登っていた

なぜか？ それは彼がグレイサル皇国の見習い騎士だからだ（意味わからんねえ）

前述の通り、グレイサル皇国はディル帝国と険悪な状態にあつた
だが、その勢力は凄まじく均衡していた
押されたら押し返す、といった生半可なものではなく、一部分を押したら別の部分が押されていたといった状態だった

今までは

近年その均衡が崩れ始めていた
ディル帝国が召喚した悪魔
イサル皇国を破つていったのだ

それが闇の魔導を使い次々とグレ

そこでグレイサル皇国は“魔女”の物語に頼ることにした
5000年の時を生き、 様々な魔導を生み出し、 その力はいか
なる魔導士をも上回る、 最強の女性

彼女ならディル帝国が召喚したより上位の悪魔を召喚する方法を
もしくはその悪魔を打ち破る^{すべ}術を
持ち合わせているのかもしぬ
知っているのかもしぬ

だから、 グレイサル皇国は彼女が住むと言われている、 ヴュルサネ
スの紅蓮山に彼を派遣した
派遣された彼 アルベルトは嫌がるわけでもなく、 逆に喜んだ
だ！！

まあ、 いわゆる熱血キャラなのである
その性格がいつか災いすることを彼は知らない
今回書こうとも思わない（おい）

「ふう……」

約5日かかってアルベルトはようやく頂上に辿り着いた
紅蓮山の名は伊達ではなく、 頂上にすら草木1本生えていない
ただ、 赤い大地が広がるだけである

そのなかに1件だけ小さな家が立っていた
アルベルトは一目で覚つた

「あれが……魔女の家か……！」

さつきの疲労はどこへやら
アルベルトは一直線に駆け出すると、 そのままドアを蹴破らん勢いで体当たりをする

「だれかいませんか！？」「
いるから突つ込むな
ドアを壊す気か」

勢いよく開いたドアはアルベルトの顔面に勢いよく激突した

「前代未聞の事か？」

「お前だれだよ……？」

ドアを開けた少女は呆れ果てていた

かわいらしい顔をしており、ポニー・テールは短い小柄で、上はブカブカのローブ、下は細めのジーンズ持つている杖は曲がりくねった木製で、実は強力な杖『マンドラゴラの根』と言われているのだが、剣一筋に生きてきたアルベルトにはそんなこと分からなかつた

「ま、
“魔女”か！？」

人の家は夕々ケルがまじておいて、儀そぞな言し分たな」

グレイサル皇國の使者として参った

…… そういえばあなたの名前は?

少女 ウィネ・ビフロンスはアルベルトを見下すように言った
そんな態度にイラつきながらもアルベルトは辛抱強く説得を試みた

「じゃあ、ウイネル「断る」……なにも言つてないが……」

あつさりと断られたアルベルトは軽くずつこけた

そんな彼の行動を嘲笑いながら、ウイネは次の言葉を綴る

「貴、ある王国に頼まれたが……いや、どうでもいい

どちらにしろ私は2度と権力には頼らないと決めたのさ

それに私は“魔女”ではない

でもあんた以外に“魔女”と呼ばれる人はいないだろ？

「おしゃれ小物か」

一
四

アルベルトはウイネを
掴み上げると、家を出る
ウイネの高慢な態度に限界を迎えたのか、

「うるさい！ お前をとりあえず女王陛下の下にお連れする…！」
「… 一つ聞いてもいいか？」

抵抗はせずに質問したウイネにアルベルトは軽く尋ねると、
ベルトの返答を待たずに更に質問する

「なんでお前はそんな重い鎧を着ているんだ？」

それを脱いでせうと早く来れたはずだ」

馬二公詩集卷之二

.....」

（ ウィネは「」のときアルベルトの精神年齢を読んだ気がした（ かもしけない ）

かくして2人はグレイサル皇国の城下町に来た

徒步で

ウイネが瞬間移動魔導を使えばよさそうな気もするが、それはそれこれはこれ

「ほつ……

「スゴいだろ！？

我らがグレイサル皇国が誇る光明城だ

「お前が作ったわけじゃないだろ」

ウイネの突つ込みを無視し、嬉しそうに高笑いするアルベルト
周りの人々が振り向くほどにその声はでかかった
やがて、光明城の前につくと門番がアルベルトに気付く

「……アルベルトか！？ お前、魔女に会えたのか！？」

「どうやら2人は既知の間柄らしい

「女王陛下にお会いしたい

魔女を連れてきたと言つてくれ

「ああ、分かつた」

ドテドテと走り出す門番

やがて、門が開くとアルベルトはウイネを引き連れていく

「女王とやらばどんなやつなんだ？」

ウイネの言葉に少しムツとしながらアルベルトは注意する

「失礼な

「女王陛下と呼べ」

「ハイハイ、女王陛下はどんな方なんだ？」

「素晴らしい御方だ。それ以外は俺も知らん」

「……姿形もか？」

「ああ、大臣あたりは知っているのかもしかんがな

大臣は尊敬にあたいしないらしい

その証拠に彼は大臣の本名を言えない、覚えてない

女王陛下の名前は3秒以内に言えるくせに

そんなこんなで軽口を叩き合つてると、一際大きな扉の前に辿り着いた

ふと、ウイネがアルベルトの方を見ると彼の手が震えている
女王陛下謁見の間であるらしい

その証拠にアルベルトの表情が緊張の色に彩られていく

「ア、アルベルト・カルディロ！」

“魔女”を連れて参りました！」

「うむ、『苦労だつた』

意外にも“声”はすぐ近くで聞こえてきた
2人はまずは右を見て、次に左を見て

「“下”だ“下”

このバカもん共が」

下を見る

そこにはかわいらしい少女がいた
年は7、8歳ぐらいだろうか
身長は125cm程度しかなく、着ているものもみな子供用
しかし、その光沢からいはずれも上質な絹であることが分かる

「だれだ？」

「さあ？」

ウイネの質問に答えるアルベルト
本当に女王以外に興味ねえなお前

「余こそ“女王”エーディトじゃ」

……は？

「ほう」

「ぬうわあにいいいいいいいいいいいいいいいいい！？！？」

「

ちなみに上はウイネ、下はアルベルトだ
アルベルトの大声が不快だつたのか、エーディトは頬をぷつくり

と體のまじめ

それがますます子供らしい、
だれが見ても“女王”だとは気づか
ないだろう

「え！？」
「じゃあ、いつもメディアで見かける妙齢の美女は！？」

「お前、さつきの言葉と矛盾してゐるぞ

女王の姿形知らなかつたんぢやないのか」

「ジーザあああああああああああああああああああああああああああス！――」

「よ、余を黙殺するなあ!!!

2人の会話に割り込むエーディト

卷之三

「という訳なのだ……」

「つまり、先代女王である母親が死に、急遽まだ7歳に満たないお前が女王に選ばれたということか」

「うむ、 とてつもなく説明的セリフだがそういうわけだ
といふで……」

エーテイトは謁見の間の隅を指し示す

そこにはもんのすこく暗い雰囲気を漂わせたアルベルトかした
大きな身体がやけに小さく見えなくもない

「……アレはなんでじや？ 余はなんにもしどらんぞ？」

「誰がいるかがよく分からんが、うごめくところが、」

矛盾しまくりのセリフをおくひれもなく言うホーティア
誰も注意しない

だが、エーディトの表情がいきなり変わる

高慢な姿勢に崩つて、扇風を兼ね備えた雰囲気を醸し出しきな
表情を

「本題に入らう……この國のため、余のために力を貸してくれぬ

「…………断る」

「…………はるかに昔、」

同じような戦争があつた

ある田一方の国が我に協力を求めてきた

二〇〇〇年

明らかに皮肉と侮蔑がこもつた言いぐさだが、事実なので反論はできない

そんなエーディトを見ながらウイネはさらに言葉を重ねる

「私は暇潰しに力を貸した
力を、知恵を、誇りを授けた
結果、その国は勝利した
が……」

「……？」

ウイネの悲痛な表情がさらに話を興味深くさせていく
エーディトもアルベルトも、その他大臣連中も
ウイネの次の言葉を待っている

「報酬は……ギロチン断頭台だった」

「……！」

ウイネはさりに話を続ける

自分が知らぬ内に『国家転覆罪』に問われたこと
自分の知らない人が証人になつたこと
弁解する機会もなく死刑になつたこと

そして、判決と同時に刑が執行されたこと

「…………」

エーディトはなにも言えなかつた
見れば手は小刻みに震え、上質な縄にシワがよつていく

「我の話は以上だ……失礼する」
「まつ……！」

エーディトの言葉を最後まで聞かず、
ケルヒーは謁見の間の扉を開けると、なにも言わずに出ていった

「…………余は…………間違つていたのか…………？」

ポツリともらしたのはエーディトだった
頬には涙が1粒2粒こぼれ落ちていく

「人を…………國民を幸せにしたい…………その思いは…………間違つていたの
か…………？」

小粒な涙はやがて大粒の涙になつっていく

大粒の涙を止める者はだれも……

「下陸イテトト」

いた、
たつた1人だけだが

「私があのバカの目を覚まさしてきます！ 少しお待ちを！！」

アルベルトはやつ言つて、
謁見の間の扉を乱暴に開け放つと駆け
出していった

城を出た少女、ウイネは『マンジラガラの根』を構え、転送用の呪文を唱え始める

「汝の息吹は風と化し、我が身を運び「待てえ!!」……お前か……」

呪文の詠唱を邪魔されイラつくウイズ

声をかけた主
アリヘ川ト目掛けて再び呪文の誦唱を始める

「光より出でし、紅蓮の業火よ！　全てを飲み込む焰と化せ！！！
ミドルファイア
中位火炎魔導……！」

紅蓮の焰は真っ直ぐにアルベルト目掛けて飛んでいく

間一髪回避し、反論するアルベルト

「つるさいクズが」

「ひどいなおい！？！？」

「お前の主も似たようなものだ」
俗物などみな総じてクズだからな

反論を瞬殺するウイネ

それに対するアルベルトの反撃はビンタだ

向へ

真っ赤になつた右頬を押さえ、
ウイネはぶつた本人を見据え言う

「 」の場合はパーじゃなくグーだと普通通りのだが……お前男だし

ウイネの検討違いな抗議を聞き流し、 アルベルトは少女の胸ぐらを掴む

「 今……なんと言つた……？」

「 ふん、

お前の主も所詮は俗物、 つまりはクズだと言つたんだ」

「 ふざけるなよ……！」

今までにないくらい怒氣を孕ませるアルベルト

それをまっすぐに受け止め、 なおかつ平然と怒りを露わせるようになことを言つウイネ

はたから見たら凄まじい痴話喧嘩に見える気がしないでもない

「 ふざけるなよ貴様！ あの御方がどれだけ國のために心を碎いているのか……分かつて言つているのか！？！？」

「 ほう、 そんなことは知らなかつたな

てつくり、 わがままで自分本位な奴だと思つていたのだが……

そうか、 あの高慢な態度は周りに嘗められぬためか

高慢な態度はウイネとて当然だと思つのだが、 それはまあ置いておく

彼の思いが伝わったのか、 アッサリと訂正するウイネにアルベルトは胸ぐらを掴むのを止め、 地面に下りす

「 ふん……だが、 ビッひひじり、 我はどんな国にも手助けする

氣はもはやない

そう女王に伝える

「 しかし……」

なんとか抗弁しようとするアルベルトだが、突如城の中で轟音が轟く

「「「...? ! ? ! ?」」

一斉に城の方を振り向く2人

見れば城から黒い煙がもうもうと上がり始めている

「なつ……なんだあ！？」

「……まさか……エリアテレボーション広範囲瞬間移動魔導！？」

それに上位爆裂魔導！？」

「悪魔か！？」

「ああ、おそらく！」

ハイブラックアート上位魔導は中級の悪魔でも使える！」

慌てる人々

城の中の様子はどうなっているのか……

一刻も知る必要が彼にはある

「ウイネ！ 僕を謁見の間へ飛ばしてくれ！！」

「……ちつ！ 仕方がない……！」

空を舞う姫君よ、エリアテレボーション天驅ける竜王よー！ 我が支配する空間を運

べ！！ 広範囲瞬間移動魔導！！」

ウイネとアルベルト、2人を光が包み、その光は城の中に飛んでいった

ウイネとアルベルトを包んだ光は謁見の間に着く直前、 不可視の
障壁に弾き返され、 2人は数百m後方に弾き飛ばされる

「かはつ がつ！」

固い地面に叩きつけられ、もう数m転がりながら2人はなんとか立ち上がる

そこは不運にもデイル帝国軍の兵士が多数詰めている所だった

Г Г Г Г Г Г Г Г

The word

時より
まれ

そして時に動か出す

障壁魔導に弾き返されたんだな

「其鬼之子」之方也。

えええ！！！

固有名詞を必要としない「ザ・」共（酷いな）は一斉に小剣や長剣を引き抜く

アルベルトも負けじと長剣を抜こうとするがウイネに制止される

「ウイネ！？ なんでだ！？！？」

お前はノガガ

「…………」

先頭にいた長剣を持った男が大上段から長剣切り下ろす
が、それは天井に引っ掛けたり動かなくなる

「アレ？」

戸惑つそのスヰを見逃さず……ウイネは一気にその男との距離を詰めるそして、

「紅蓮の炎よ、
敵を飲み込め！
下位火炎魔導！」
ローファイア

下位火炎魔導！

それは小型の炎だったが、確実に男に直撃する

「ま、魔導士か!?」

火だるまになつて転がる男

その姿を見た敵が怯むそのスキを逃さず…… ウィネはさらに呴文を詠唱する

「光の閃光、燃えつの牙よ！ 热を纏いて敵を飲み込め！」
中位 ミッド

灼熱の閃光が小剣を持っていた敵2人を飲み込む
ショートラン

ああ！！！

目は関係ないだろ

ともかく、灼熱の閃光は2人の身体中に火傷の傷を刻んでいく
しばらくは痛みで動けないだろう

あ
！
！

卷之二

方は左から斬り込む

普通なら

2本とも謹に弱つ歯がいなナれば

「八？」

「バカが

廊下なんていう狭いところで長剣を振り回すバカがドコにいるんだ
すぐに壁に引っ掛かるに決まっている

「こういう狭いところでは小剣を使うのが基本だ」

このときアルベルトはなぜウイネが自分の長剣を抜かせなかつたのをようやく理解した

「トソード」という狭いところでは、戦斧や長剣、バトルアックス・ソード、キャリバーソード、ダガー、ショートソードの方が有利だ

攻撃範囲の広さが逆に仇になつてしまつからだ
だが、^{ランス}槍だけは広範囲の攻撃範囲を誇るにも関わらず狭い室内で
も使える

「“突き”は横の攻撃範囲が狭いためだ
^{ブラックアート}
魔導は力加減を調節すれば遠近両方使える

そのため、 ウィネは1人で3人を蹴散らせたのだ

「天に光る稻妻よ！ 我が魔力に応じよ！ 邪惡なる敵を討ち滅ぼ
す力を我が諸手に与えよ！！ 上位稻妻魔導！！」

廊下が凄まじくなにかを引き裂くような音と共に輝いたと思うとそ
の光は消え、 黒焦げになつたザコ2人とウィネ、 アルベルトが
いた

「急ぐぞ」
「お、 おう！！」

アルベルトはこのときウィネが味方で本当によかつたと心の奥底か
ら安堵した

同じよつこ、 襲い来る敵々を上位爆裂魔導や中位氷槍魔導等々で
吹き飛ばしながらウイネたちは謁見の間に辿り着いた

「争う音がしてない……？」

「障壁魔導が発動されているんだ

守つているか、 占拠されたかビツチかだろ」

「よしつ！ 突にゅ……！」

いきり立つて扉に手をかけるアルベルトだが、 ウイネが彼を突き飛ばす

細身な身体に似合わずある力は、 長身な彼をよろめかせ、 握つていた扉を開けさせる

「なにするんだ！ ウイ……！」

アルベルトの言葉よりも早く飛んできたのは無数の槍だ
それは数本外しながらも小柄な身体に次々と突き刺さる
何本か貫き、 その穂先からは紅い血が滴り落ちていき、 彼女の
身体がビクンと震える

「魔女……！？」

声をかけたのは捕らえられた女王だ
白銀の鎧に身を包んだ騎士が小さな身体を抱えあげている

「ふん……所詮はこの程度か……」

漆黒に輝く鎧に身を包み、
黒の大剣を携えた騎士は嘲るよつに言

い切る

彼の隣には漆黒のローブに身を包んだ謎の男がいた
大柄な黒騎士よりもさらに大きく、頭には牛の角のような突起ら
しきものがある

「お前の力を借りるまでもなかつたな」

「ふん、ぐだらん“魔女”も所詮は人間か」

「魔女……？」

「ウイネ……？」

ウイネはピクリともしない

いや、風に吹かれたようにブラブラと揺れており、紅い血がボ
タボタと滴り落ちている

「嘘だろ……？」

「魔女

！？！？

」

アルベルトとエーデイトの叫び

ウイネはそれに答えなかつた

その叫びには

「少し……昔話をしようか……」

「……………？」

「……………？」

致命傷のはずなのに、 平然と喋り始めるウイネ

驚く人々を放つておいて、 ウイネの“昔話”が始まる

「もう5100年も前……1人の女性がいた

彼女は素晴らしい魔導士であり、 同時に母親でもあった」

「母親……？」

エーディトの問いかにも答えず、 ウイネは身体を揺らしながら続ける

「彼女はその優れた才能で様々な“奇跡”を生み出し、 あらゆる人々に感謝された

「だが……それを恨み、 増む者もいた」

「…………」

「ある日、 彼女はある呪いを跳ね返した

呪いをかけた本人はその呪いを受け死亡

だが、 彼には何人かの弟子がいた

「…………弟子だと……？」

「その弟子は彼女が最も愛する赤ん坊を狙つた

父親はすでに事故で死んだため、 彼女は赤ん坊に深い愛情を注いでいた

だが、 時には深い愛情はその深さだけ傷つくこともある

「……………？」

「……………？」

だれもがウイネの言つていることがよく分からずについた

エーディトを除いては

彼女の顔は青ざめて、 手は震えている

「奴らは蘇生不可能の死の呪いを赤ん坊にかけた

返すひまなくその赤ん坊は死んだ

彼女は嘆き悲しんだ、 それと同時に怒り狂つた

彼女は最近生み出した呪いを使った

一瞬にして死に至らしめ、 なおかつその魂が永遠に苦しみ続ける呪いを

そして彼女は悪魔を呼び出した

今でも目を閉じれば思い出せる

女性自身の血で彩られた魔方陣に数多の人の手で作られた“栄光の手”

そしてもはや息の無い赤ん坊を抱えあげ、 貧血でフラフラにならがらも大きな声で懇願する女性

お願いします！！ この子の、 この子の代わりを

！！

そしてこの身体に閉じ込められて 5000年以上の時が過ぎた

“魔女”と称えられた女性はすでに死に、 その魂も魔力も回収したその気になればこの身体を脱け出して、 いつでも魔界に戻れるだ

らう

それでも戻る気にはなれなかつた
なんだらう……？

ああ、きっとあの女性の感情に触れてしまったからだらう
汚い存在がいた、人を人とも思わずただ道具として扱つた者
潔い存在もいた、死の間際に死を死として受け止め消えていった者
そして……

ただ、自らの子供を愛しそれを脅かす者は全力をもつて排除した
者も

「人は……みな同じ人類なのによくこんな千差万別の生き方や信念
を持てるのか……まったく興味が尽きない」
「な、なに言つてゐるんだ！ とつと止めをさせ……」

半狂乱になつて叫ぶ黒騎士

更に他の者が、槍を細い身体に突き立てていく
血が身体から飛び、鮮血が口からこぼれる
足元に落ちてゐる血の量は明らかに致死量をこえている

だが、平然と

意思のある瞳を黒騎士に向けてくる

「なぜだ!? なぜ死なん!?!?」

「“悪魔”だからな」

「……………?……………?……………?」

ウイネのアッサリとした告白に驚く一同
ただ1人、黒いローブを纏つた男を除いては

「ふん……やはり人では殺せぬか」

「……殺せ! ザッハーケ!! 殺すのだ!!」

「分かつてる」

ザッハーケと呼ばれた男は黒いローブを脱ぎ捨てる
褐色を通り越して黒色に染まつた肌

頬には涙のような紅い筋

髪は少し薄めの朱色

その髪から闘牛のような白い角

翼や尾はない

爪は鋭く、牙もある

特徴を簡単にト書きするといつこう感じだ

これが悪魔か

アルベルトはザッハーケの姿を見て、少し残念に思つていた
なんかもう少し怖そうな角だつたり、巨大な翼だつたりが欲しか

つたらしい

「これは一体……！」

紅い霧はそのまま雑兵を包み込み

黒騎士、キヤラ完全崩壊

それを見たサツバニケは怪しく笑う

「人の生命力を奪う術^{すべ}を心得ているとはさすがだな……」

だが……」

ザッハーカは腕を振るい、
ウイネに振りかざす

勢いにのせた一撃は届くことはなく、
ウイネが一步後ろに下がったためだ

「ちつ！」

「突風の使者よ、 荒れ狂う角よ！ 1つに集^{つど}いて空を貫け！！
中位烈風魔導！！！」

「雷の巫女よ、 轟く雲よ！ 閻を切り裂き光と化せ！！ 中位稻妻魔導！！！」

風と稻妻が2人の目の前で直撃し、 爆発する

その爆風に全員が吹き飛ばされる

だが、 ザッハーカとウイネは素早く受け身をとると、 呪文の詠唱を始める

「あらゆる万物を碎く力よ！ 我が両手に集え！ 紅き光よ、 鳳^{おおとり}

となりて空を穿^{うが}て！！ 上位爆裂魔導！！！」

「天に光る稻妻よ！ 我が魔力に応じよ！ 邪惡なる敵を討ち滅ぼす力を我に諸手に与えよ！！ 上位稻妻魔導！！！」

爆発と稻妻が再びぶつかり合い、 更に巨大な爆発がおこる
ザッハーカが爆風に吹き飛ばされ、 受け身をとるが、 その時すでにウイネは攻撃体勢だ

「闇よ、 全てを飲み込む悠久の闇よ……」

詠唱の声は低い、 悪魔や邪神のような恐ろしい感じがする
心なしかザッハーカの顔が蒼い

「一筋の希望も逃さぬ邪惡な光と……」
「ま……まさかこの呪文は……最上位魔導……！？！？」

上位悪魔でさえめったに使わぬ最上位魔導

ハイデビル

エクストリームリー・ブラックアート

しかもこの詠唱はその中でもさらにコントロールが困難な……

「夢も、希望も、未来でさえ……一欠片も逃さぬ重き絶望と共に」

「まさか……貴様は……セエレ……！？！？」

知つて いる 最上位 悪魔 の名 を 混乱 し ながら 叫ぶ ザッハーラ
だが、 もはや その 声 は ウィネ に 届いて は い ない
エクストラ・ドーティル

「禍よ！ 再び世界を包み込め！ 阿鼻叫喚を呼び覚ませ！！ 最^エ」

「...」
「...」

ザツバークの叫びも虚しく、 ウィネが生み出した暗黒球はザツバークと黒騎士を包み虚空へと消えていった

「疲れた……帰る」

一
あ
お
い
・
・
・
・
・

アルベルトの声を無視し、瞬間移動魔導を唱え出すウイネ

「惡魔！」

「ああ?
なんだ?
」

エーディトの叫びに少し不機嫌になりながらも律儀に振り返るウイネ
普段とは違う満面の笑みでウイネに答えるエーディト

初めて見せる微笑み^{ほほえみ}
その笑顔を最後に瞬間移動魔導を唱え、 悪魔の魔女は風と共に消えた

グレイサル皇国とデイル帝国の戦争は少しずつ変わつていった

元々切り札ともいえる悪魔、ザツハーケが倒れたのだ

デイル帝国の士気が落ちると共に、 グレイサル皇国の士気が急上昇したのだ

少しずつだが、 グレイサル皇国がデイル帝国を押し始め、 今の

戦況は戦争当時と大して変わらなくなつていた

そんな中、 エーディトは大臣と話し合つていた

「 悪魔には感謝している

生きていれば再び会えるのか？」

「余えましょ、今は無理でもまたいつか

「そつか！

……といひでの騎士見習いはどうなつたんだ？

最近見ないな

……」「

答えたのは将軍だった

「修練をしていますよ

まだまだ未熟ですので」

「ふうん……そつか」

そつかそつか

そう呟くとエーディトは無邪気な少女の顔から再び厳格ある女王の顔に戻る

とても危険な闘いだった

だけど、同時に深い思い出もある

2度と味わわない

それはいかなる絹や黄金よりも彼女の心に輝いている

「また……余えるよな！」

彼女はやつと城の外の景色を眺めた

「ふん……」

ウイネは静かに自宅で紅茶を飲んでいた

今日は楽しかった

千差万別の瞳、人生、信念
綺麗も汚いも併せ持ち、相手を愛することで生まれる強さと弱さ
を併せ持つ人間
悪魔には清さと弱さ
だからこそ魔界に戻る気がしない

「これだから面白いな……人間という奴は」

そう言つと彼女は再び紅茶を口に運び、外を眺めた

「くつそお~」

城の外でアルベルトは汗だくでへたりこんだ

彼の周りにはすでに修行メニューを終えた同僚たちが集まっている

「あんのボケエ……なんでオレだけ倍なんだ……」

「イビられてんだろ」

「将来に期待してんじゃねえか？」

「いや、いじめられてんだろ」

仲間たちの声を聞き流し、アルベルトは自分の胸を見つめる

そこには紅い宝石のネックレスが輝いている

これはあのあと、エーテイトにもらったのだ

この一件の褒美として

これが内心嬉しくて堪らない

「なうににやけてんだ？ ん？」

「なんでもねうよ、バうカ」

にやつきながらアルベルトはネックレスを握り、空を見上げた

3人が見た空は雲一つなく、どこまでも晴れ渡っていた

(後書き)

他の小説もよろしくお願ひします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8702f/>

悪魔の魔女

2010年10月28日08時31分発行